

1節. 「これらのことを話したのは、あなたがたをつまずかせないためである。」  
「躓く」。6章61節参照。信仰から離れること。「ここで、来るべき苦難や迫害の予告や聖霊の到来について語られたのは、信仰からの離反を妨げるためである。これらのことについて理解していることは、当然迫害に耐える力を与える。迫害は選びの証しであり、イエスの運命に与ることである。それが弟子たる者の辿る道である。何もかも分からなくなって、信じることを止めるということが防がなければならない。マルコ14章27, 29 平行には、イエスの受難に躓くことが述べられている。すなわち信仰はこのことをも認容している信仰でなくてはならない。」（伊吹）

2節. 「人々はあなたがたを会堂から追放するだろう。しかも、あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考えの時が来る。」  
「会堂からの追放」という言葉は、9章22節、12章42節、そしてこの16章2節のみ、つまり新約聖書では3回しか出て来ない。「それはキリスト教のユダヤ教からの独立を意味する。それ以前はまだ会堂に属していた可能性を指している。だがそれどころか追放だけではすまされず、『殺す』ということが神の名において行われるであろうと言われる。それは迫害の極致であって、イエスの運命を分かち合い、主に倣う者となることである。ユダヤ教からの独立は『許可された宗教』に準ずることも失い、それはローマ帝国の迫害の可能性にもさらされることである。ユダヤ教によるローマへの告訴も勘定に入れなければならないであろう。ユダヤ教は、キリスト者を神を冒瀆する者《10:33 参照》と見なすであろうと言われる。もしそうならそのような者を殺すことは神への奉仕であるという理屈も出るであろう。」（伊吹）。（使徒8章1-3節、9章1-2節参照。紀元90年のヤムニア会議）

3節. 「彼らがこういうことをするのは、父をもわたしをも知らないからである。」  
迫害の理由は、迫害者が父なる神も主イエスも知らないということに由来している（8:19節参照）。15章21節「しかし人々は、わたしの名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。」  
17章3節によると「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」とある。問題を「知る」ことである。

4節. 「しかし、これらのことを話したのは、その時が来たときに、わたしが語ったというのをあなたがたに思い出させるためである。初めからこれらのことを言わなかったのは、わたしがあなたがたと一緒にいたからである。」  
主イエスが語った言葉こそ、躓きを防げることができる。「思い出す」は15章20節においても迫害に関して用いられている。「思い出す」ことは、何よりも聖霊が「思い起こさせる」（14:26）によって可能となる。

5 節。「今わたしは、わたしをお遣わしになった方のもとに行こうとしているが、あなたがたはだれも、『どこへ行くのか』と尋ねない。」

主イエスは繰り返し御自身は父なる神から遣わされたと言ってきた。派遣された者は派遣した者のところへ帰ることが派遣ということに含まれている。「派遣の完結は、救いの完結なのである」(伊吹)。主イエスが御自身を「お遣わしになった方のもとへ行く」ことは、十字架上で死と復活を意味している。主イエスが御自身をお遣わしになった父なる神のもとへ行くには、必ず、十字架で死にそれから復活をして天に昇っていくことを通してである。

「イエスが去るにさいして『どこへ行くのか』ということが決定的に大事なのである。これまでは救いに関してイエスの派遣のどこから、すなわちイエスが父のもとから来たということ信じることが主題的であったが、今やこの派遣に関してイエスがどこへ帰るかが問題なのである。しかしこの問いは既に 13 章 36 節でペトロによってたてられ、14 章 4 節では、イエスによってどこへ行くのかその道はあなた方に分かっているとされ、……。弟子たちは別れという状況に沈みこんで、それが何のためであり、救いにとってなぜ必然的であるかを考えず、またイエスに尋ねることをしないのである。13 章 36 節のペトロの問いは、イエスが去ることに関して、イエスが何か生命の危険の中に赴くのではないかと、という危惧をもっているだけなのではないかとい疑いが、36 節のイエスについて、行って命をも捨てると言われていたことから察しられるのではないかと。つまりそれは死について妥当する。そういう危惧からだけイエスがどこへ行くかと聞くことは見当違いであることが、38 節のイエスのペトロの三度の否認の言葉から窺えよう。確かにイエスは死に赴くのであるが、肝心なことは死は『父のもとへ行く』ということの意味しているということである。……。死を父のもとへ行くとして理解することは、既に死を終わりではなく生の初めとして理解することなのであり、それは未来への展望なのである。従って第二の別れの説話はこの言葉で始まっている。『父のもとへ行く』ということは救いへの展望を開くのである。このことが分かるということに重点が置かれている。」(伊吹)

6 節。「むしろ、わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている。」

「これらのことをはなした」という言葉は、1 節、4 節に続き 3 回目となる。「これらのこと」とは、迫害も含めて別れの状況全般に関わることであろう。

「このイエスの言葉の弟子たちに引き起こした反応は『悲しみ』(λύπη、ルペー)であった。この語はヨハネ福音書では 16 章のみに出る(6, 20, 21, 22 節)。この悲しみはイエスが父のもとへ行くということが、別れという面だけから、と絶えられていることに起因する。事実それは別れである。イエスが父のもとへ行くということが救いの完成であるという展望と希望は、別れということに隠されてしまっている。弟子たちの、そしてわれわれの無理解が示されているのである。しかし実際にこの救いは、理解のし難ささとそれと共に必然的に生じてくる信じる者の悲しみを伴うということもまた真なのである。そしてそれは克服される悲しみなのである。」(伊吹)